青山国際政経論集 101 号，2018 年 11 月

研究ノート

大劇場のシェイクスピア
――エイドリアン・ノーブルの『冬物語』

狩　野　良　規*

エイドリアン・ノーブルの舞台について書いておきたい。ノーブルは僕が研究休暇をもらって渡英した 1991 年にロイヤル・シェイクスピア劇団（Royal Shakespeare Company, RSC）の芸術監督に就任した。僕の 1 年間のストラットフォード詣では，彼の RSC のボスとしての初舞台『ヘンリー四世』2 部作（ロイヤル・シェイクスピア劇場，1991 年初演）に始まり，同じくノーブルの『冬物語』（ロイヤル・シェイクスピア劇場，1992 年初演）に終わった。

ロイヤル・シェイクスピア劇団が本拠とする劇場は，ヴィクトリア朝ゴシック様式のあまり誉められた外観とはいえない建物，その中に 1,500 人収容のロイヤル・シェイクスピア劇場と 400 席ほどの中規模劇場，スワン劇場が入っていた。

当時は，1986 年に開設されたスワン劇場が飛ぶ鳥を落とす勢い。三方を客席に囲まれたスラスト・ステージ，ピーター・ブルックの衣鉢を継いだ「なにもない空間」で，装置も照明も音楽も最低限，すぐ目の前にいる役者たちの演技とセリフ術で観客を魅了する。RSC の演出家たちや俳優たちは何の変哲もない額縁舞台（プロセニアム・ステージ）の大劇場より張り出し舞台（スラスト・ステージ）のスワン劇場で芝居をやりたがり，僕も小劇場のシェイクスピア劇に「これが僕の求めていた演劇だ」と小躍りした。

*　青山学院大学国際政治経済学部教授

© Aoyama Gakuin University, Society of International Politics, Economics and Communication, 2018

そんな中でテリー・ハンズから財政難の国立劇団の芸術監督を引き継ぎ，ひとりメイン・ステージで気を吐いていたのがエイドリアン・ノーブルであった。彼の芸術監督の期間（在 1991–2003 年）は，大劇場生き残りのための模索期だったともいえよう。また，RSC の大劇場はその後，2010 年に約 1,000 席のスラスト・ステージの劇場に大改造されて，今日に至っている。

そこで本稿では，旧ロイヤル・シェイクスピア劇場で僕が見た最後の芝居『冬物語』を題材にして，ノーブルの大劇場演出について語りたい。なお，この『冬物語』は 1994 年に銀座セゾン劇場で来日公演が行なわれているので，ご覧になった方も多いだろう。

舞台中央に大きな壁があったかと思うと，照明によってそれが透けて見えるようになる。なんだ，紗幕だったのか。その紗幕の中から人々が出てきて，開幕。あずき色の椅子，色彩豊かな風船の数々，あっと息を呑むすばらしい大劇場演出である。

シチリア王レオンティーズ（ジョン・ネトルズ）は幼なじみのボヘミア王ポリクシニーズ（ポール・ジェッソン）を自分の宮廷に招いて歓待する。だが，もうそろそろ帰国しないと，と言うポリクシニーズ。ハーマイオニ（サマンサ・ボンド）は夫レオンティーズに頼まれて，今しばらく滞在するようにと，ボヘミア王を説得する。ところが，レオンティーズはその王妃の様子を見て，彼女がポリクシニーズと不貞を犯しているのではないかと疑ってしまう。

レオンティーズの抱く突然の嫉妬と疑惑の傍白は，他の人物たちを静止させて，シチリア王に語らせる。ノーブルはいろいろとアクセントをつける。が，この唐突な感情の激変を観客に納得させられるかどうかは，結局役者の力量にかかっている。それも客席との距離がある大劇場の舞台で。

この戯曲，登場人物たちの性格の書き込みは，必ずしも深くない。「四大悲劇」であれほど人間の心の深淵を覗（のぞ）いたシェイクスピアが，しかし「ロマンス劇」では昔話の人物たちよろしく，彼ら彼女らの心理面に関しては実に舌足らずな描き方しかしていない。だから，俳優は近代劇と同じ役作りはできない。

スタニスラフスキー・システムのような，まずは役柄の感情を理解してそれをセリフや舞台上の行動に反映させる演技術はとりづらい。

また，近代以降のリアリズム文学をイメージして戯曲を読んでも，なかなか作品世界には入り込めない。題名にあるとおり，冬の炉端で語られる昔話くらいの気持ちで付き合うことだ。もっとも，今の若者たちは“実写”のドラマなら「唐突だ」,「不自然だ」と文句をつける非現実的な展開でも，マンガやアニメなら平気のへっちゃら，違和感なく楽しんでいる。だから，すべてはコンベンションの問題なのかもしれないが[1)]。

さらに，不条理演劇を知った現代人は，沙翁（シェイクスピア）が好んで描いた，突然沸々（ふつふつ）とこみ上げてくる嫉妬心を，よりたやすく理解できるのではないだろうか。『オセロー』では「緑色の目をした怪物[2)]」と語られ，『冬物語』では黄色で形容されるジェラシーなるものを[3)]。

そう，僕は人生の折り返しを過ぎるまで，他人に対する嫉妬がいかに人間を陰湿な行動に走らせるかがわからなかった。傍（はた）からみれば実に小さな心のささくれが，本人にとってはしばしば大きな衝動となる。それを知った時，なぜシェイクスピアがこんなスケールのちっちゃな家庭悲劇を書いたんだといぶかっていた『オセロー』が，にわかに偉大な傑作と思えてきた。

以後，「人を羨（うらや）ましがらず，人に羨ましがられず」は，僕の大切な処世訓となった。人にやっかまれたら，羨望されたら，どんな理不尽なバッシングを受けるかわからない。

お話は『冬物語』に戻って，レオンティーズは貴族のカミローにポリクシニーズ毒殺を命じるが，カミローは悩んだ末にボヘミア王に事を打ち明け，二人はシチリアを脱出する。だが，ハーマイオニは身重の体で投獄され，レオンティー

1）　僕のゼミで『冬物語』を読んだ際に,「つまらない」,「どう読んでいいのかわからない」,「どこが名作なんだ」と非難ごうごうだった学生たちへの僕の反論より。

2）　“green-eyed monster.”（*Othello*, III. iii. 170）。

3）　“‘mongst all colours / No yellow in’t, lest she suspect, as he does, / Her children not her husband’s!”（*The Winter’s Tale*, II. iii. 105–107）。どんな色でもいいが，黄色だけはお姫様の心に注がぬように，とポーリーナがレオンティーズに語る。

ズは彼女の大逆罪を証明しようとデルフォイのアポロ神殿に神託を取りに行かせる。

ヘッヘッヘッ，ハーマイオニはロシア皇帝の娘とあるから近世の国際情勢が沙翁の念頭にあり，一方古代ギリシャのアポロの神殿も出てくるわけだから，これは時代を越えた“冬の夜話”だ。

ハーマイオニを裁く法廷の場面は，野外の設定，雨の音。皆，黒い傘に黒いコート。ハーマイオニだけ紫の衣裳なのが，目に焼きつく。神託を入れた壺が割られ，アポロのお告げは――無罪。一同は喜びの声をあげ，レオンティーズだけが怒りを露（あらわ）にする。

いったいロマンス劇の前半は，観客に登場人物の艱難辛苦（かんなんしんく）をじっくりと，たっぷりと，しつこく見せる。その点，『冬物語』も『ペリクリーズ』や『シンベリン』と同様，途中休憩までの暗くて陰気で退屈な舞台を，どう客席に我慢させるかが演出の腕の見せどころである。

また，こういうゆっくり燃える（スロー・バーニング）芝居は，やっぱり役者がうまくないと緊張感が保てない。レオンティーズ役のジョン・ネトルズは，初日が開いてほどない時期にストラットフォードで見た際には今ひとつかなと思ったのだけど，2年間の上演を経て銀座セゾン劇場に来た際には，いやお見事な演技。突然の怒りの爆発にも説得力があった。

美味しい役は，シチリア貴族アンティゴナスの妻ポーリーナである。男どもが国王の激怒にひるむ中，ポーリーナはひとりハーマイオニを弁護して，レオンティーズに詰め寄る。扮するは名優ジェンマ・ジョーンズ。

さらにハーマイオニも毅然として申し開きをする。命は捨てても名誉は守る，と。これがまた格好いいんだ。だが，神託は無罪を告げたものの，愛する王子は母親を心配するあまり他界したとの報が寄せられ，ハーマイオニは気を失う。舞台ではフラッシュがたかれ，白い衣裳の彼女が紗幕の中を天に昇っていく。大劇場での宙吊り芝居。ほどなくハーマイオニ逝去の知らせが届く。

『冬物語』の鬼門は熊である。3幕3場，アンティゴナスがレオンティーズに命じられて，ハーマイオニが獄中で生んだ赤ん坊をボヘミアの海岸へ捨てに行

く。そこに熊が出現し，食い殺される。さて，どうリアリティを醸すか。RSCの熊は着ぐるみ，ちょいと陳腐。舞台を暗くし，フラッシュを光らせ……苦労してますな。

休憩をはさんで，後半は4幕1場から始まるのが，この芝居の定番である。コーラス役の「時」が登場して，いきなり「16年が過ぎたぞ〜」と宣言する。若い時は，『冬物語』の舞台を見るたびに，「何，これ?!」と思ったものだ。けれども，人間60歳を過ぎると，全然違和感がない。20年，30年ぶりに旧友や親類と再会することは，ままある。いや，学生時代の友だちから突然電話がかかってきて，「おう，元気か?」，「なんだ，珍しいじゃないか。相変わらずだよ。おまえは?」，「俺は元気だ。でも，○○が死んだんだ。明後日が葬式。おまえ，出られるか」，「何っ!」……だから，16年の時空を越える話なんて珍しくもない。沙翁も晩年に近づき，ごくごく自然に筆を走らせたのではないか。

で，RSCの旧劇場では，後半が始まる前から役者が2人，舞台に出ている。すると，おっ，上方から風船のついた巻紙が落ちてきて，幕間後のまだざわついている観客の集中力を喚起する。役者たちが巻紙に書いてある「時」のセリフを読む。

それから，この作品の名物男，小悪党のオートリカス（リチャード・マッケイブ）も風船に乗って登場する。後方に空の幕がかかる。いかにもという青空に白い雲。リアルにあらず，おとぎ話風。緑色の風船との相性もぴったり。ノーブルの舞台は鮮やかな色彩感覚がひとつの特徴である。

一方，老羊飼いの息子たる道化は自転車に乗って現れる。道化は舞台中央で後ろ向きになり，ズボンの後ろのポケットからオートリカスが財布をすり取る。2度目は横向き，次々に時計，帽子，自転車まで奪われる。道化が「何時だ」と聞くと，オートリカスが道化から盗んだばかりの時計をすかさず見せる。

シェイクスピアの悪名高き勘違い――あの長靴型のイタリア半島に蹴っ飛ばされて形の崩れたサッカーボールのようなシチリア島を内陸の地とし，ボヘミア（現チェコ西部・中部）を海岸地帯と記している。むろん巨匠を弁護すべくい

ろいろな解釈が百出している[4]が，おそらくは大陸へ行ったことがなかっただろう沙翁が，書物の知識を基におおらかに筆を運んだと考えるのが素直なところであろうか。

陽気な盗人オートリカスとのどかなボヘミアの地で行なわれる祭りの様子（4幕4場）は，『冬物語』前半の深刻な空気を一気に吹き飛ばす。シェイクスピアはイングランドの春から初夏にかけての風物詩，羊の毛刈り祭[5]を念頭に置いて戯曲を書いたようだが，この長いシーンはどの公演でも大きな見せ場となる。

ノーブルの舞台では，あっという間に役者たちが村祭りの用意を整える。風船と三角旗，テーブルを並べ，バンドが入る。子供たちがシャボン玉で遊ぶ。オートリカスがカバンを開けると，ネオンがチカチカッ。女の子たちとマイクの前で歌う。最初はあがってしまって歌えない娘たち。さらに，村の男たちが大きな棒と2つの赤い風船を持って踊る。ペニスのつもりだ。場内は大笑い。

ごった煮のフェアである。ノスタルジックな雰囲気はディズニー風でもあり，スイスのヒッチハイカーらしきいでたちの人物も登場し，ちょっとエロい踊りが加わり，もちろんイングランドの田舎の気分も漂わせる。これ，ひとつ間違えたら，安っぽい三文芝居になってしまう危険な演出である。

祭りの間に道化は，「おらあ，悲しい内容を陽気に歌い，明るい話を悲しげに歌うのが好きだ」と。人生は悲劇でも喜劇でもない，悲喜劇だ，ってか。『冬物語』の基調がそれだ。

4）『冬物語』が執筆されたであろう1611年ごろ，時のイングランド国王ジェームズ一世の長女エリザベスとドイツのプファルツ選帝侯フリードリッヒとの結婚が噂され，事実二人は13年に結ばれている。快活で美しく，民衆の間でも人気の高かったエリザベスがドイツに嫁ぐのを，人々は一様に惜しんだという。シェイクスピアもドイツのすぐ東に位置するボヘミアの地を理想郷でありたしと願い，シチリアとボヘミアの気候風土を知って知らんぷり，両者を入れ替えたのではないかという説もある。ルネサンス精神史の碩学フランセス・イエイツの『シェイクスピア最後の夢』（藤田実訳，晶文社，1980年，原著1975年）を読まれたし。

5）日本で田舎といえば田畑の広がる景色が思い浮かぶが，イギリスは農耕よりむしろ放牧の国。今日でもロンドンを離れれば，すぐに羊や牛や馬が遊ぶ牧草地が目に飛び込んでくる。とくに暖かそうな毛でモコモコの羊たちはおなじみの光景だが，その羊たちが急に丸裸にされているのを見ると，夏ももうすぐそこと実感される。

また，アンティゴナスが海岸に置いていったハーマイオニの娘パーディタは，羊飼いに拾われて今やステキな娘に成長していた。そして彼女に恋したのが，なんとポリクシニーズの息子フロリゼルだった。ボヘミア王子は羊飼いの娘として育てられたパーディタに，身分の違いなどかまわない，結婚しようと迫る。だが変装して村祭りに紛れ込んでいたポリクシニーズが，その話を聞いてしまう。当然雷が落ちる。愚か者，王位を継ぐ者が！

国王の怒りに老いた羊飼いは，「静かに墓に入りたかった……1 時間前に死んでいたら，天寿をまっとうできたのに」と。僕の好きな小さなセリフがたくさん見いだせる戯曲である。

話は変わるが，ヨーロッパ全体の大劇場の舞台美術が変わってきた，と聞いたのは，1990 年代も後半になってからだったろうか。舞台装置をコンピュータ制御で転換する技術が進み，それ以前のように豪華絢爛な美術ではなく，しかしたしかに金のかかっている，シュールでシンプルな舞台作りが流行りはじめた。とくに「ことば，ことば，ことば」の世界たるシェイクスピア劇の場合は，どんなに装置を組んでも，俳優の朗じる詩行を邪魔しないことが大切。

その点，僕がイギリス滞在中に見たエイドリアン・ノーブルの舞台は，いずれもカラフルでダイナミックだがゴテゴテしていない，大劇場らしい視覚的な効果を上げることをめざしながら，同時に観客が俳優のセリフを聴いて想像をめぐらす余地を残したスッキリとした作りになっていた。

それはかつてのスペクタクル劇とは異なる，新しい視覚性の模索にほかならなかった。ノーブルの大劇場演出は，まさにその方向性の先触れとなった[6)]。

村祭りは夕立に遭い，オートリカスがマイクをとって歌っている間に，役者

6）　ノーブルは 1994 年に『夏の夜の夢』（ロイヤル・シェイクスピア劇場，来日公演は 1997 年）を演出，これも新しい視覚性に富んだみごとな作品だった。ピーター・ブルック演出の伝説的な『夏の夜の夢』（1970 年，来日公演 1973 年）へのオマージュと銘打って，彼の舞台からせっせとパクッた。色彩鮮やかにして，観客の目を奪いすぎない，詩がきちんと聞こえてくる作品。生身の俳優を小さな妖精に見せるために，ノーブルはたくさんの巨大な電球が輝く森を作り，その非現実的でシュールな明かりの中を，パックと妖精が傘につかまって上下する。それはいわば，大劇場におけるピーター・ブルックへの回帰をめざした芝居であった。

たちがさっさと後片づけをしてしまう。後ろにあった空を描いた幕も下ろされて，場面はシチリアに戻る。その転換の速さたるや。

5 幕はハラハラと落ち葉が舞い，毛刈り祭の時期から哀愁漂う秋景色へと一変する。シチリアとボヘミアという二つの世界を季節の移ろいの中に視覚化してみせる。レオンティーズは 16 年たった今も，妻の貞操を疑って彼女を死なせた愚行を悔いて，悔悟の日々を送っている。そこにフロリゼルとパーディタが逃げてくる。レオンティーズはポリクシニーズの不興（ふきょう）をかった恋人たちを見て，自身の亡くなった二人の子供たちを思い出す。さらにボヘミア王が後を追ってきたと聞き，和解の仲立ちをしようと考える。

子供に先立たれた親の気持ち。シェイクスピアも息子ハムネットに 11 歳で死なれている。ましてや子供と，そして妻をほとんど自分のせいで死なせてしまったレオンティーズの胸の内は――まあ，一生喪中といった気持ちであろう。そのシチリア王に，かつて彼が毒殺までしようとしたポリクシニーズとその息子の反目の仲裁役がまわってくる。ささやかな罪滅ぼしができるかもしれない。

ロマンス劇はいつも最後がバタバタする。ほどなく老羊飼いと道化の証言，そして証拠品によって，パーディタがレオンティーズの娘であることがわかる。さらに最終場（5 幕 3 場）では，ポーリーナが彼女の家の礼拝堂に一同を案内し，レオンティーズは最近完成したばかりだというハーマイオニの彫像と対面する。すると，その亡き妻の石像が動きだすではないか。おゝ，ハーマイオニは生きていた！

シェイクスピアは登場人物たちが驚嘆する秘密を，観客には前もって知らせておくのが常なのだが，亡きはずの王妃がポーリーナに匿（かくま）われて生きていた事情は，客席に伝えていない。観客もレオンティーズらとともに，一族の再会を喜ぶことになる。

と，そうね。初めて戯曲を読むと，まことに唐突，非現実的，奇想天外なのだが[7]，僕は学生のころに渋谷のジァン・ジァンでシェイクスピア・シアター[8]

7） わがゼミ生たちも，とくにこのラストシーンにはブーイングの嵐を浴びせてくれ

の公演を見てこの再生シーンに感激して以来，どの『冬物語』の舞台を見ても，結末を知っていながらワクワクしてしまう。

ノーブル版は，ステージの中央前方に後ろ向きのハーマイオニ（像），真上からのスポットライト，石像が動くところは音楽が助けていた。

エイドリアン・ノーブル曰く。人は誰でも人生でひどいことをしたことがあるはずだ。家庭での悲劇，また交通事故の加害者になるとか。そんな人間がもしそれを償う第二の機会を与えられたら何をするかと，この劇は語りかけているんだ[9]。なるほど。

僕は何十年来，ハリウッドのハッピーエンドを目の敵にしてきた。根拠のないハッピーエンドは，僕の好き嫌いを越えて有害だ，そんな「パイプ・ドリーム[10]」ばかり見せられていると，人生観が歪（ゆが）んじゃうよ，娯楽作品ほど気づかぬうちに刷り込まれるから怖いんだ，と繰り返している[11]。しかし僕も早 60 代，やってはいけないことをやってしまった記憶も，そりゃないわけではなく

た。曰く，「茶番としか思えない。出来過ぎ」，「極端だな。ハーマイオニが生きて出てくるのはムカつく」，「複雑さとか信憑性がない」，「死んだ人間が生き返ったら，たいていは「よかったね」と思うはずなのに，そういう感動がない」と。読むとリアリティのないその台本が，舞台で見ると，意外や意外……ってのが，芝居の摩訶不思議なところなんだけどね。

8） 出口典雄率いるシェイクスピア・シアターは，渋谷の公園通りにあった東京山手教会の地下，100 人も入ればいっぱいになる穴倉のような小劇場ジァン・ジァンで，シェイクスピア劇を演じまくった。1975 年から毎月 1 本ずつ，小田島雄志が沙翁劇を訳すそばから舞台に乗せ，6 年間で全 37 作品を上演し終えた。俳優は若手ばかり，メイクなし，衣裳も普段着，小道具少々，照明の変化なし，音楽は生演奏。大学生だった僕に，シェイクスピア劇と「なにもない空間」での芝居の面白さを最初に教えてくれた貴重な連続公演だった。感謝！

9） ロイヤル・シェイクスピア・カンパニーの来日公演時のパンフレット（銀座セゾン劇場，1994 年）所収の扇田昭彦によるインタビュー記事「『冬物語』の演出を語るエイドリアン・ノーブル」より。

10） pipe dream．阿片を吸って思い浮かべる夢想，非現実的な妄想。総じてヨーロッパの人々もハリウッド映画のハッピーエンドを悪し様に非難し，馬鹿にする。むろんハリウッド映画は楽しいから彼らも見にはいくのだが，自分たちはそういうご都合主義の映画をほとんど作らない。

11） 拙著『スクリーンの中に英国が見える』（国書刊行会，2005 年），『ヨーロッパを知る 50 の映画』正・続（国書刊行会，2014 年）をご参照あれ。僕の映画批評はいつも，ハリウッド映画が仮想敵である。

――長年苦労を重ねてきた人間が，後年そのご褒美にあり得ない奇跡を体験するってのも，いいんじゃないかと思える年になった。

そう，人生は幸福な結末の喜劇に収めたい，いやせめて悲喜劇にとどめたい。

さても僕がイギリスに遊学していたころ，辛口で鳴らした，それゆえに彼女が誉めている舞台なら絶対大丈夫という批評を書く劇評家ジェーン・エドワーズは，エイドリアン・ノーブルの『冬物語』をこう評していた。「ノーブルはまたしても RSC のメイン・ステージでお手本を示した。しかしテリー・ハンズもピーター・ホールもトレヴァー・ナンも小劇場に回帰している今，RSC の芸術監督としては，他の演出家たちに自身の技術をきちんと伝授しなければいけない[12]」と。

前述したとおり，RSC の大劇場はノーブルが芸術監督を退いた後，観客席を 1/3 潰して，スワン劇場と同様のスラスト・ステージの劇場に生まれ変わった。それはある意味，大劇場のスペクタクル劇を放棄したといえるだろう。だが，その件については稿をあらためて論じることにしたい。（2018 年 7 月脱稿）

12） ロンドンの週刊情報誌『タイム・アウト（*Time Out*）』の 1992 年 7 月 8 日–15 日号に掲載されたジェーン・エドワーズの劇評より。